



日本赤十字社

京都第一赤十字病院

人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.

ハル

泉山長老
俊朝

京都第一日赤日より

き す な

人道と奉仕の赤十字精神に基づき、
患者さまにとって安心できる
適切な医療を行います。

秋号

2017年10月発行

vol. 66

Contents

病診連携懇話会の開催報告	2,3
就任のご挨拶／完全予約制拡大のお知らせ	4
がん診療連携ワークショップの開催報告	5
新しい持続血糖測定器について	6
お知らせ	7

秋風がそよいでも、頭痛の種には事欠かない昨今の医療事情ですが、今の私にとって特に悩ましいのが「新専門医制度」です。予定では本年10月には来年度専攻医のプログラムへの募集が始まります。真の専門性を反映し、国民に分かりやすい制度を作るという国や学会の方針には賛成ですが、現状は厚労省・専門医機構・学会や都道府県などからの情報が乏しいうえに錯綜しており、各領域・各施設ともに暗中模索の状況です。特に私が担当する内科専門医に関しては、当初掲げられた「総合内科的基礎のうえに臓器別専門性を作る」という理念が

反対勢力の声に押されて、大きく後退しました。また、地域医療を守るという最も重要な部分は都道府県に丸投げされ、行政も限られた時間と情報に四苦八苦しておられる様子です。最近、「新臨床研修制度（初期研修）と同じで、最初はバタバタするけど、そのうち落ち着くよ」などという楽観論が聞かれますが、それでよいのでしょうか？ 今回の制度は、明日のわが国の地域医療に影響を与えるのみでなく、10年、20年先の日本の医療の質を決めていくことになると考えます。長期的な視点に立って、なすべきことをしっかり見極めたいものです。

副院長 福田 互

病診連携

Hospital & Clinic
Cooperation

懇話会

開催報告



病診連携懇話会を平成29年7月6日(木)にハイアットリージェンシー京都で開催いたしました。今回は会場を1つにまとめ、参加者数の減少も想定しておりましたが、昨年度同様に多くの方々にご参加いただくことができました。

第1部では新しい試みとして、「糖尿病における地域医療連携」をテーマとし、院外からは和田内科医院の院長 和田 成雄 先生にご講演をしていただきました。

第2部では新任部長2名の紹介、講演、当日欠席となりました第一整形外科部長の植田、形成外科部長の岩井については、VTRによ

る紹介をさせていただきました。

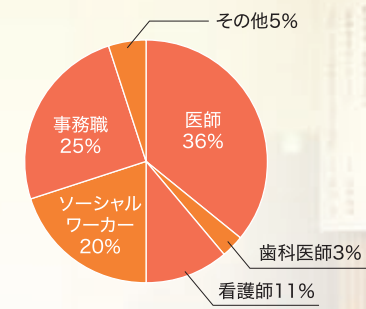
第3部では今年度より新院長に就任した池田の紹介を含め、当院の今後の方向性、取り組みについて講演させていただきました。

懇親会では、会場一杯になるほどの地域の先生、連携施設の職員の皆様に多くご参加いただき、今後の地域医療連携にとって非常に実りあるものになったと思っております。

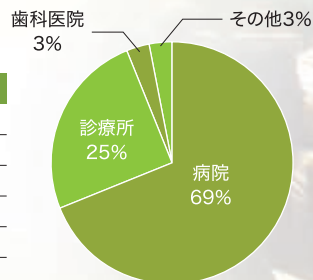
今後も多くの方にご参加いただけるような病診連携懇話会を企画してまいりますので、次年度以降もご参加くださいますようお願い申し上げます。今後とも京都第一赤十字病院をよろしくお願いいたします。

● 院外参加者内訳 ●

職種	数
医師	54
歯科医師	4
看護師	16
薬剤師	0
ソーシャルワーカー	30
事務職	37
その他	8
合計	149



所属機関	数
病院	103
診療所	38
歯科医院	4
その他	4
合計	149



平成29年度 京都第一赤十字病院 病診連携懇話会



プログラム 17:30~

【第1部】糖尿病における地域医療連携

座長：副院長 福田互

「病院からの視点」 糖尿病・内分泌内科／部長 田中亨
「かかりつけ医からの視点」 和田内科医院／院長 和田成雄 先生

【第2部】新任部長の専門分野と今後の取り組み

座長：院長補佐 浦田洋二／大澤透

「CT・MRIにこまでわかる」 放射線診断科／部長 大野浩司
「リハビリテーションにおける痙攣治療」 リハビリテーション科／部長 池田巧

【第3部】当院の目指すべき地域医療連携

就任のご挨拶 ～当院の現況について～ 院長 池田栄人
新任部長、副部長の紹介

「医療安全のトレンド」 副院長 塩飽保博
「当院における医療連携の現状と課題」 副院長 福田互

第1部

「糖尿病における地域医療連携」 病院からの視点

糖尿病・内分泌内科 部長 田中 亨



当科では、糖尿病に関して早期・軽症例から合併症進行例・救急対応まであらゆる症例に対応できる体制をとっています。教育入院は患者さんのニーズに合わせてクリニカルパスを用いた平日5日間コースと週末3日間コースを設けており、そのうち週末入院を経験した患者さんの、退院後経過観察している施設別に3年以上の長期の成績を提示し、専門医が定期的に経過を確認することで長期に渡って良好なコントロールが得られたことから、退院後も年1回の当院通院を提案しました。

次に最近経験した症例をもとに、低血糖を起こさないよう年齢、罹病期間、低血糖の危険性、サポート体制など個々の状況に応じて血糖コントロールの目標を設定することの重要性、特に高齢者では認知機能や基本的ADL(着衣、移動、入浴、トイレなど)、手段的ADL(買物、炊事、服薬管理、金銭管理など)、併存疾患なども考慮して個別に設定することの必要性を説明しました。

更に新しく保険適応となったフリースタイルリブレを用いた持続血糖測定目的での外来紹介(本紙P6参照)についても案内しました。そのほか、当科では糖尿病昏睡、合併症悪化、感染症合併、シックデー対応から、診断のための75gOGTT目的まで、幅広い患者さんに迅速に対応できることを紹介しました。

第2部

新任部長の専門分野と 今後の取り組み

リハビリテーション科 部長 池田 巧

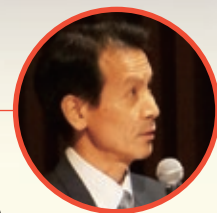


平成29年度病診連携懇話会において、超急性期および急性期リハビリテーションの役割を担っている当院のリハビリテーション科を紹介させていただきました。前方連携先から各診療科にご紹介いただいた症例に対し、早期からリハビリテーション介入を行うことで、不動や廃用を防止するだけではなく、早期機能回復が得られます。そして地域の医療機関との後方連携を密にして回復期および生活期への円滑な移行を図ってまいります。また、リハビリテーションにおける痙攣治療について講演させていただきました。上位運動ニューロン症候群の一徴候である痙攣は、リハビリテーションの阻害因子の一つでしばしば問題となります。京都府立医科大学で実践してきました治療について幅広く紹介させていただきました。リハビリテーションの分野は急速に発展しています。ロボットリハビリテーションをはじめとする先端技術が積極的に導入されています。当院のリハビリテーション科もハード面およびソフト面でも質の高いリハビリテーションを提供できるように努力して参ります。今後ともご指導いただきますようよろしくお願いいたします。

第3部

医療安全のトレンド

医療安全推進室室長 副院長 塩飽 保博



1999年は横浜市立大学と都立広尾病院において医療事故が相次いで起こり、メディアと警察が介入したため、日本の医療安全元年と言われています。それまでは、医療事故はあってはならないこと、個々人の注意で防ぐことができるはずとされていましたが、2000年以降は、医療事故は誰にでも起こりうることで、チームや組織全体の在り方を改善しなければ防止できないとされました。その一つの手法がKYT(Kiken Yochi Training)で、状況設定を行い、①その中にどんな危険があるか想定、②一番危険な点を追求、③具体的な対策を立てる、④対策のうち必ずすべき項目を設定、という4ラウンド法で行ないます。皆で決めたものがそこでの答えであり、正解はひとつではありません。トレーニングを行なうことにより、おのずと医療安全に対する意識が向上していく効果があるため、各医院、病院でもぜひ一度行なっていたいただきたいと思います。

就任のご挨拶

Inaugural
greetings



みなさま、はじめまして。9月1日から救急科副部長に着任いたしました、堀口真仁と申します。

今までの歴任地としては、日本赤十字社和歌山医療センターの救命救急センター等で4年、京都大学医学研究科で6年、ニューヨーク大学医学部で5年、群馬県の前橋赤十字病院高度救命センターで2年半ほど働いておりました。

この間に感じたことは多くありますが、その中のひとつが「最高の救急は何処にも無く、最適の救急のみがある」との思いです。その土地、その病院や医師ごとにそれぞれ異なることがたくさんありま

救急科副部長

堀口真仁



す。「前の病院ではこうだった」「どこそこの病院ではそんなことしてなかった」などと言う人を「でわのかみ」と呼びます。「救急医療はかくあるべきだ」「医者はこちらすべきだ」と主張する人を「妖怪ベキ」と言います。そのように呼ばれてしまうことがないよう、柔軟な頭脳で、院内外のみなさまに色々ご教示頂いて、当院の組織および京都の地域医療に早くとけ込み、患者さんの健康維持を支援できたら、と思っております。ご指導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

完全予約制拡大のお知らせ



当院では平成26年3月から整形外科において初診患者様の完全予約制を実施しておりますが、平成29年11月1日（水）より下記の6つの診療科を対象に拡大させていただきます。

当院は地域医療支援病院の役割として外来診療機能の適正化を図り、ご紹介いただく患者様の待ち時間軽減および診療の質を高めてまいりますので、ご協力いただきますようお願い申し上げます。

なお、当院への外来診療予約についてはFAXによるお申し込みを受け付けておりますので、是非ご利用ください。

血液内科

腎臓内科・腎不全科

小児外科

呼吸器外科

心臓血管外科

放射線治療科

「放射線を使ったがんの診断と治療」をテーマに第18回京都第一日赤がん診療連携ワークショップを開催いたしました。講演は放射線診断科大野浩司、泌尿器科 伊藤博万、放射線治療科奥山智緒、桐谷真澄、古谷誠一が担当しました。要旨を簡略に説明します。

多くのがんはCT/MRI・PETといった放射線診断機器で診断・ステージングをしますが、どの診断機器を使えば正診に至ることができ、検査情報が増えるかについて講演しました。

当院では放射線同位体（RI）内用療法に取り組んでいます。昨年認可されたゾーフィゴ（ラジウム製剤）の内用療法を開始しました。「骨転移を伴う去勢抵抗性前立腺癌」に適応があります。関連して前立腺癌治療とゾーフィゴの適応について解説しました。血液内科と協働して低悪性度B細胞リンパ腫のRI内用療法を開始します。使用するゼバリン（イットリウ

ム標識CD20抗体薬）は濾胞性B細胞リンパ腫やマントルリンパ腫などに集積して、周囲の腫瘍細胞に殺細胞性に働く治療薬です。「放射免疫療法」として講演しました。

放射線治療は多くの患者様にはなじみが少なく、不安を覚える方も多いです。適切に説明・ケアすることで患者さんは症状や不安に向き合うことができます。外来治療が多くなり、開業の先生方にも放射線治療の亜急性期・晩期の症状を見ていただく機会が増えています。亜急性期から晩期のケアについて説明しました。リニアック更新後5年間の治療について検討しました。肺定位放射線治療・脳定位放射線治療・前立腺がん強度偏重放射線治療で従来報告されている治療成績に劣らず、安心して治療を受けていただけることを示しました。

皆様との直接のコンタクトが少ない放射線診断・治療の分野のワークショップにもかかわらず、医師・看護師・診療放射線技師・薬剤師と分野を超えて多数参加いただいたことに深く感謝いたします。

放射線治療科 部長 古谷誠一



新しい 持続血糖 測定器について

糖尿病・内分泌内科

部長 田中 亨
医長 岩瀬 広哉



【左】Freestyleリブレ
【右】Freestyleリブレpro

いつも当院との医療連携にご協力いただきまして、感謝いたします。7月の病診連携懇話会でもお話ししましたが、新しい持続血糖測定についてご紹介いたします。

装着したセンサーに読取機をかざすだけで、血糖値が測定可能な血糖測定器、それがFreestyleリブレです。医療機関専用のFreestyleリブレproと患者さん向けのFreestyleリブレの2種類があり、隠れた血糖パターンがわかる新しい血糖測定器です。今回は、主に『Freestyleリブレpro』をご紹介します。

血糖値は1日の中でも変動するため、通常の血糖測定やHbA1cでは良好にみえても、食後に著しい高血糖になっていたり、就寝中に低血糖になっていたりすることがあります。この機器で持続的に血糖値を測定することで（最長14日間連続して測定可能）、これまでの血糖測定ではわからなかった血糖変動がわかり、より良い血糖コントロールにつなげることができます。

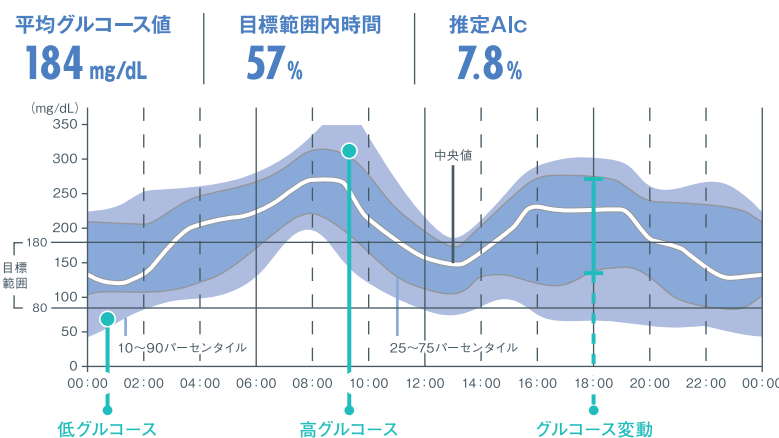
上腕部にセンサーを貼り付け、起動します。装着時に痛みはほとんどなく、装着中は何も行う必要はありません。そのまま入浴や水泳も可能です（水深1m以内、30分以内）。装着したセンサーで15分おきに血糖値が記憶され、受診時に読取機をかざすだけで、血糖値が自動表示され、低血糖、高血糖な

どの血糖変動がわかります。費用は、保険料が3割負担の患者さんの場合4014円です（初診料など除く、2017年9月時点）。注意点は、妊娠中の方や埋め込み式医療機器装着中、透析中や6歳未満の方は使用できないこと、若干の誤差が生じることなどがあります。

当院ではこの測定器で200人以上の患者さんに血糖測定を行い、ご自身の目で血糖変動を見ていただけることで、高い満足度が得られています。9月より注射製剤を使用中の患者さん向けのFreestyleリブレも保険適用となりました。こちらは装着したセンサーに自ら読取機をかざすとその時の血糖値がわかる機器で、当院でもまもなく導入予定です。

一度Freestyle リブレpro で患者さんの血糖値を測ってみられませんか？ご紹介をお待ちしています。

グルコース値やその変動データを
実用的なトレンドやパターンにして表示



お知らせ Information

読売
健康講座

ピロリ菌除菌と胃酸コントロールで健康に生きる
～食道炎から胃潰瘍・胃がんまで～

【日 時】
平成29年11月23日(木) 14時～15時30分

【会 場】
メルパルク京都4階 研修室3

※詳細は、別紙をご参照ください。

第53回

がん患者・家族のための学習会 交流会・かけはし
～ここが知りたい 緩和ケアってなに？～

【日 時】
平成29年11月29日(水) 14時～16時

【会 場】
京都第一赤十字病院 管理棟5階 多目的ホールB

※詳細は、別紙をご参照ください。

第18回

東山糖尿病医療連携懇話会

【日 時】
平成29年12月2日(土) 17時～18時45分

【会 場】
ANAクラウンプラザホテル京都2階「醍醐の間」

※詳細は、別紙をご参照ください。

第19回

京都第一日赤 がん診療連携ワークショップ

【日 時】
平成29年12月7日(木) 18時15分～

【会 場】
ホテルグランヴィア京都3階「源氏の間」

※詳細は、別紙をご参照ください。

連携室だより

巻末コラム 43

「実りの秋」と銘うって、友人より果物のおすそわけが届きました。そのみずみずしく甘い味覚を噛み締め喜びで心が躍りました。しかし、一方で秋の寂寥感のなせるわざか、私自身はこの秋までに何か実りとして収穫できるものがあったかな〜と、日頃の自分自身の生き様に憂いを感じてしまいました。秋という季節は、心に訴えてくるような不思議な力もあるようです。

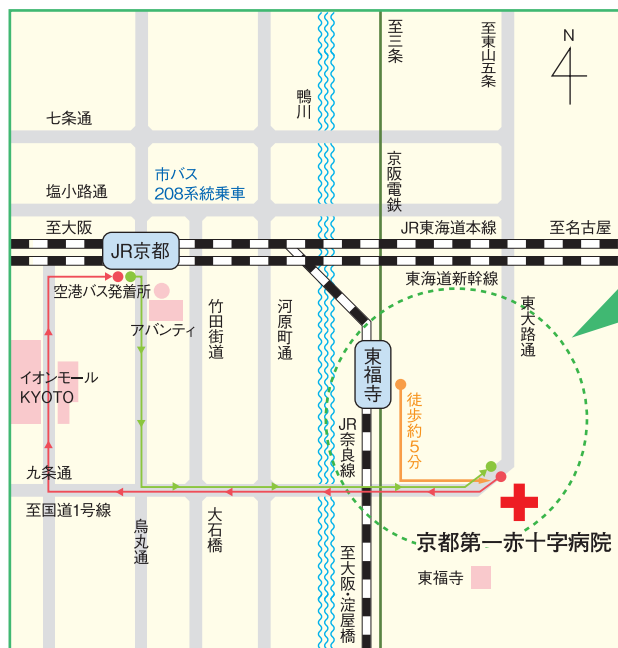
思えば今年、小林麻央さんの生き様が世間で話題になり、その体験から醸成された心に残るメッセージと共に、多くの人々に在宅ケアや緩和ケアについても考えさせられる機会になったと思います。全国の緩和ケア病床は、378施

設7695床あるようですが、在宅で最期を迎える人も2007年では6%台でしたが、2015年には10.4%となり、急速に増加（厚生労働省「人口動態統計」）しているとのこと。私達医療関係者は、このような方々の状況に対応できるように、必要とする情報や知識を発信できるようにしていく一方、私達が出会う様々な方の生き方を学びつつ、組織を超えたつながりで最後までその人らしく生きられるように協力して支援していきたいと改めて思いました。今後も色々な機会が連携の充実となれるように頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

地域医療連携室

Access to Japanese Red Cross Kyoto Daiichi Hospital

当院へのアクセス



電車をご利用の場合

JR奈良線、京阪電鉄…「東福寺」駅下車、徒歩5分

バスをご利用の場合

市バス202、207、208系統「東福寺」バス停で下車

車をご利用の場合

【奈良、大阪方面から】…京都南IC出口、国道1号線を北へ約2.5キロ京阪国道口を東（右折）へ、九条通りを約2.5キロ

【山科、大津方面から】…国道1号線を西進、東山五条交差点を南（左折）へ、東大路通りを約2キロ

【京都駅付近から】…竹田街道を南へ約500メートル、大石橋交差点を東（左折）へ九条通りを約500メートル

無料シャトルタクシー運行のご案内【JR京都駅八条口⇄病院（地下鉄九条駅経由）】

	八条口発 病院行き	病院発 八条口行き
始発便	7:45 次発 8:10、以降30分間隔で運行	9:00 以降30分間隔で運行
最終便	16:10	16:00

※12:40八条口発の便は運行しておりません。 ※12:30病院発の便は運行しておりません。

※交通状況により時刻に遅れが生じる場合があります。
※運行は平日のみとなります。土・日・祝日等病院の休診日は運行いたしません。
※定員9名のため満員の場合は次の便をご利用ください。

京都第一赤十字病院

京都市東山区本町15-749 TEL.075-561-1121

地域医療連携室 【直通】TEL.075-533-1280
FAX.075-533-1282